

初々しい感性で気づき直行

上 廣 榮 治

雨に打たれて草木がひときわ初々しい緑に変ずる六月は、一年の中で最も心躍る時節の一つです。と書いて、さてと思ひ返したのは、それでは他の月はどうなのだろうかということでありませう。

陽春四月、新緑の五月、そして灼熱の季節も、実りの秋も、新しき年を予感させる冬の月々も、みな「一年の中で最も心躍る時節」でもあり得るのではないかと思ひ返したのです。

しかしその反対に、すべての月を「憂鬱な時期」として捉えることもまた可能なのです。春の憂鬱、梅雨の陰鬱、夏の酷暑の耐え難さ、秋の脱力感に、身も心も凍てつく冬の絶望の日々……。

巡る季節に対する、まるで正反対のこの二つの感じ方を分けるものは何かといえ、それは人の心のあるやうなものです。その人が初々しい期待をもって新しい月を迎えるのか、嫌々迎えるのかによって、はつきりと両極端に分かれるのです。

私たちの毎日は、季節に限らず、ありとあらゆる事態が日々新たに改まっていく時の流れのなかに推

移しています。時々刻々、一瞬一瞬、同じ時は二度と繰り返されることはありません。私たちは常に新しい瞬間を生きているのです。その新しい時々を希望の瞬間として捉えるか、幻滅げんめつの瞬間と思うかでは、人生そのものまでが大きく変わっていくように思われます。

しかし現実には、私たちは日々の「変化」に鈍感です。変化があつても、またいつもと同じ日だとしか感じないのです。なぜなら、いつまでも変わらないと思つたがつているからです。たとえ大きな変化に直面しても、まだこれまで通りでいいだろう、何とかなるだろうと考えたがります。いよいよいけなくなつてもまだ、「もしかすると」大丈夫かもしれないと思おうといたします。

倒産した会社の経営者たちの三分の一が、自分の会社が危ないかもしれないと感じたのは、倒産のわずか半年前だったという調査結果があるそうです。倒産の原因の一つは、危機に気づくのが遅すぎたことであつたのです。

なぜ、私たちは変化を嫌い、変化に目をつむろうとするのでしょうか。多分、今の仕合わせは十分とはいえないまでも、ほどほどのものではある。しかもそれは、自分たちの長い間の努力の末によやく手に入れたものだから、大事にしたいと思つているからでしょう。あるいは、この仕合わせを手放せば、明日はもっと悪くなるかもしれないと恐れているのでしょう。だから多くの人が変革を恐れ、現状を守ろうとしてあがくのです。

しかし、その試みは最終的にはことごとく失敗の憂うれき目をみることになるでしょう。人がどのように力を尽くそうとも、時の流れを押し留めることはできないのです。だとしたら、無駄な抵抗はやめて、新しい事態に積極的に応じるほうがいいに決まっています。今の仕合わせを守りたいなら、変化を無視したり否定するのではなしに、一旦は、今もてるすべてを捨てる覚悟で、新しい事態に真正面から対峙たいじ

し、むしろ変化を活用して、より善い明日を築くほかはないのです。

荒れる海を行く船は、次々に襲い来る波に舳先を真正面に向け続けることで、高波を乗り切る事ができるといえます。しかし、少しでもひるんで波を避けようとするならば、たちまち激浪に翻弄されて操舵の自由を失い、はては転覆にいたるのです。

わが会では、「朝の誓」で「新しく大地に生き貫きます」と誓います。一日一日は前の日とは異なつた一日である。だから、今日を昨日とは一味違う「より善い日」にしよう、今日一日の「新たな」精進を誓うのです。

私たちは、日々時々刻々、ありとあらゆる瞬間に出会い続ける「新しい事態」に、少しも臆することなく、積極的に、そしてなにより「初々しく」対処していこう、私は皆様にそうご提案いたしたいと思えます。なぜ、初々しくかといえば、初々しい生き方こそが、最も美しい生き方だと信じているからなのであります。

「初々しい」とは、辞書によれば、「物馴れぬさま」であり「初心である、幼げである」ということです。それは、時々刻々に新しく出会う事象の一々に、新鮮な情動をもって反応し、子どものように曇りの無い眼と心で、真正面から対応しようとする生き方です。

それは、老獪な知恵に満ちた人、物馴れたベテランなどからすれば、素人くさく愚かしい生き方に見えるかもしれません。しかし私には、老獪な処世の才知に満ちた人の生き方は、常に私心と保身に囚われているがために、あるいは自分の見識や問題解決能力に慢心しているがために、かえって愚かしく危険なものに見えてならないのです。

今現在起こっていることは、いかに老練な人間にとつてさえも、「初めて」際会する事態なのです。

彼らは、過去の知識に照らして、どこがどのように異なっているのかを知ることができたとしても、過去の対処法そのままを用いて、ことがすむはずはありません。ところが、物事に年古りとしふるていなければならないだけ、あるいは過去に大きな成功を収めていなければならないだけ、人はそれに囚われて、事態の「新しさ」が見えなくなつて、過去の対処法でことをすまそうとするのです。

先頃、ある県の観光課長さんとお話する機会がありました。話は、観光開発の一助いちすけにと、プレスツアーを催もよおした時のことになりました。招待したのは有名雑誌の編集長たちから、若手のライターたちまで。丸二日のコースを回つて、県の観光をテーマに話し合つてもらつたところ、これは、と思える新鮮で的確なプランを口にしたのは、若い駆け出しの人たちばかり。大編集長たちはまったくの期待外れであつたそうです。

おそらくベテランたちは、何度も訪ねたことがあるために、すべてわかつたつもりになつていて、新鮮な心と眼で見ることができなかつたか、バスのなかで居眠りをしていたに違いありません。

では、年齢が若いほど、初々しい感性をもっているかといえは、そうともかぎりません。いくつになつても、好奇心と知的興味に眼を輝かせ続けている先輩たちも大勢おられます。その反面、もはや何事にも興味を失い、死んだ魚の目をして、自分が攻撃され非難されるのではないかという妄想もうそうに、怯え萎縮しゆくしている若者もたくさんいます。

前者はその私心のなさと、生き生きとした活動振りにおいて本当に美しく、後者は自分へのみ囚われた、いいようのない暗さにおいて、まことに醜みにくく思われるのです。

わが会も活性化や改革が課題になつて昨今です。日々刻々、移り行く事態を真正面から受けとめて、初々しい感性をもつて、気づき直行していただきたいものがございます。